

牛久：学校周辺に見る自然

第36号 筑波実験植物園

2011年9月1日発行

< 植物園で昆虫観察 ～ 夏のトンボ >

第19号で、筑波実験植物園で初夏に見られた昆虫たちの紹介しょうかいをしました。今回は8 / 17、真夏まなつの植物園でみられたトンボたちの紹介です。

1. アジアイトトンボ（イトトンボ科）



日本をはじめ、広くアジアで見られることからついた名です。左がオスで右がメス。まるで、別のトンボのように見えますね。この辺では、池や田んぼなどで、春から秋まで見られます。アオモンイトトンボというよく似たトンボもふつうに見られるので、まちがえないようにしましょう。

2. ハグロトンボ（カワトンボ科）



初夏から秋にまっ黒な翅はねをひらひらさせて飛ぶ、珍めずらしくしくなりつつあるトンボです。ヤゴようご（幼虫）はヨシなどの茂ったゆるやかな流れに暮らし、夜半から早朝に羽化うかします。若い成虫せいちゆうは風通しのよい林の中で生活せいじゆうしますが、成熟すると再び流れにもどり水草さんらんに産卵さんらんします。翅が黒いから「ハグロ」ではなく、歯を黒く染めるのに昔使われた「お歯黒おはぐろ」に似ているためだそうです。写真のように体に金属光沢きんぞくこうたくがあるのはオス。

3. ギンヤンマ（ヤンマ科） 4. オニヤンマ（オニヤンマ科）



飛んでいるトンボを、写真とるに撮るのは難むずかしいしいですね。なかなかピントがあってくれません。ギンヤンマは、オスどうしが盛んに縄張り争なわばりあらそいいをしていました。大型のトンボで、シオカラトンボなどを食べてしまうこともあるそうです。オニヤンマはさらに大きく、ややうす暗い水辺によく見られます。林に囲まれた池に、産卵さんらんに来ていました。フラッシュの光に反射して、眼が青白く光って撮れました。どちらもピンボケですが、載のせておきます。

5. チョウトンボ（トンボ科）



私のお気に入り。チョウのようにひらひら^{まう}舞うようすは、とても魅力的^{みりよくてき}です。光の当たる角度などで青い金属光沢を示したり、虹色^{にじいろ}に輝いて見えたりするのも素敵^{すてき}です。よく見ると、翅^{はね}の黒い部分と透明の部分^{あせ}が、それぞれ少しずつ違うようです。シオカラトンボはギンヤンマによく追い払われますが、このチョウトンボはもっと弱いのか、シオカラトンボに追い払われるのを時々見かけます。

6. シオカラトンボ（トンボ科）



田んぼや池、公園、校庭など、いろいろな所で、赤トンボと並んでいちばんよく目にするトンボではないでしょうか？オスは成熟^{せいじゆく}すると、写真^{しやうしん}のように腹部^{ふくぶ}の背中側に白粉^{みじゆく}が出てきますが、未熟^{みじゆく}なうちはメスと同じく黄色っぽい色をしているので、見まちがえることもあります。そんな時は、複眼^{ふくがん}の色を確認してください。オスでは青み^{あおみ}が強く、メスでは褐色^{かつしよく}を帯びた緑色^{きよいろ}といった感じ^{かんじ}です。また腹部^{ふくぶ}の端^{はし}も違います。

7. ナツアカネ（トンボ科）



最後にナツアカネ。赤トンボの仲間^{なつか}は、胸部^{きょうぶ}のもよう^{よう}でいたい^{たい}区別^{くべつ}できます（22年度44号を参考に）。この辺^{へん}で一番よく見かけるのは、ノシメトンボ、アキアカネ、そしてこのナツアカネでしょう。この中^{ちゆう}ではやや小型^{せうがた}ですが、オスは秋になると顔^{かほ}までまっ赤^{あか}かになって、まるで酔っ払い^{よっぱらい}のおじさんのよう^{よう}です。ただし、メスは成熟^{せいじゆく}しても赤くならないので、胸部^{きょうぶ}のもよう^{よう}を確認^{かくにん}しないと、アキアカネとまちがえる^{まちが}こともあります。この日^ひ（8/17）は、猛暑^{まうしょ}がもどってきても暑い^{あつ}日^ひでした。ナツアカネも暑^{あつ}かった^かのでしょう。お日^ひ様の光^{ひかり}をまともに受^うけないように、逆立^{さかだち}ちしている^{して}ものが多く見^みられました。それなら日陰^{ひかげ}にとまればいい^{いい}じゃないかと思^{おも}うかもしれ^しませんが、なぜか日^ひなたで逆立^{さかだち}ちする^{する}のですね。その理由^{りゆう}はまだよく分^わかってない^{ない}よう^{よう}です。他にも逆立^{さかだち}ちする^{する}トンボ^{とんぼ}はい^いますが、赤トンボ^{あかとんぼ}の仲間^{なつか}に多^{おほ}いよう^{よう}です。【理科支援員 宮内】